

八幡太郎よこあこ風雲録

— 疾風編 —

すずめ  
の集



「余は、悪者じゃ。悪いことをするぞ。くるしゅうない、どんな悪いことをすればよいか、言うてみよ」

「はは、さすれば、銀行強盗などいかがでございませう」

「うむ。でかした。銀行強盗であるか。それは、どのようにするのじゃ」

「銀行に押し入ります」

「なに押し入るとな。それは、いくさじゃな。よし、馬を引け、先祖伝来の鎧甲を用意いたせ、陣ぶれをいたせ、よし押し出すのじゃ、命惜しむな、名こそおしめ……」





てんで、  
わーつと繰り  
出しますな。  
銀行の支店の前  
に陣を構えます  
と、ひとりの武将  
が前に出て、

「やあやあ、とおか  
らんものは音にも  
聞け、近くば寄って  
目にも見よ、われこそは  
八幡太郎よしあし……」

さて、あしか銀行たんぽぽ支店に  
強盗せむとて押し寄せたる八幡太郎よしあしが  
軍勢、2万8千456・3。



「ええい、一気に踏みつぶせ」

ホラ貝の合図とともに、  
ときの声あげて先陣を争うは、  
いずれも一騎当千の猛将なり、

一番柴田、

二番が黒江、

王三番、

長島四番、

五番末次……

搦め手から攻めるはジャイアント馬場、

怪力豊登、

闘将吉村道明、

沖識名、

ユセフトルコ、

キムイル大木金太郎。





まさに、あしか銀行たんぽぽ

支店落城かと思いきや、

現れ出でたるは、当支店随一の

案内係とその名も高き

佐藤田ミチコ。

「いらつしやいませ、お客様、

お預け入れ、お引きだし、

ご送金、公共料金のお支払いなど

は、番号カードをお引きの上、順

番にお待ち下さいませ。

銀行ローンにつきましては、

2階融資の窓口にて担当者が承り

ます」

「なななんと」

「番号カードとな」

「不覚！ よし、みなのもの後れを

とるな、番号カードを引くのじゃ」



さては、番号カード引き先陣争いの

その熾烈なこと、

一番柴田、

二番が黒江、

王三番、

長島四番、

五番末次……

搦め手から攻めるは

ジャイアント馬場、

怪力豊登、

闘将吉村道明、

沖識名、

ユセフトルコ、

キムイル大木金太郎。

案内係・佐藤田ミチコ

に導かれ番号カードを





引くこととなつた八幡太郎よしあしの軍勢2万8千472は、番号を呼ばれるのを待つべく、あしか銀行たんぽぽ支店内に陣を布くこととした。

持久戦を余儀なくされ緊張感漂う

陣中にも流れてくる店のものの声……

「84番のカードをお持ちのお客様、お待たせしました……」

「山田商店様、どうもありがとうございます」

「ございました……」

「有限会社スカイロケット様、

申し訳ございませんが通帳の残高が不足しております……」

陣幕の中の床几に腰を掛け瞑目している八幡太郎よしあし。

「おそい。おそすぎる。家老、我らは



忘れられておるのではないか。」

「は、それがし、あのおなごにもう

一度聞いて参りまする」

「うむ。危険な役目だが、そち

以外に頼むものはおらぬ」

「ふっふっふ。この命、とうに殿にお預け

申しましたわ」

「ようゆうてくれた。すまぬ……」

「いざつ……ああ、そこな案内係とやらのおなご。

われら、八幡太郎よしあし殿が家中2万8千

456人の強者ども、番号カードとやらを

引いたが、一向呼ばれおらぬ。いかが相成つて

おるのじゃ」

「申し訳ございませぬ。お客様のカードをお見せ

願えますか」

「これじゃ……」





「ええ、鶴の千三百六十五番……ええええつ、鶴の千三百六十五番、あの伝説の鶴の千三百六十五番が出たの？……」  
さすがの手練れの案内係佐藤田ミチコ、なにやら動揺した様子。

そこへ、時を移さずして、子供の甲高い声が響き渡る。

「御富いちーばーん……」

この声がかかると、それまでざわざわ騒いでいたのが、しーんと静まりかえりますな。



「鶴の、せん、さんびやく、ろくじゅう、ごばーん」

「お、お客様！ 千両富が当たりました  
ございまするうううう。」

日頃、冷静な佐藤田ミチコの声も思わ  
ずうわずり、言葉も時代物に引きずり  
込まれてしまう。

鶴の千三百六十五番。それは落語

「宿屋の富」「御慶」の昔から、  
人々に千両という富をもたらしてきた  
摩訶不思議の番号。

千年に一度地上に舞い降りる天の鶴と  
もたとえられてきたが、その千両富に  
より幸福に暮らすものもあれば、  
却って人生を狂わせるものもある。  
果たして、天使の化身か地獄の





使者か、天より舞い降りる鶴を  
テンツルと呼び、地獄よりもた  
らされる鶴をチンツルと称す。

テンツルチンツル、  
テンツルチンツル、  
いやその賑やかなこと……。

「との、との、とおおおおのおお  
おおお！ 千両でございまする。」

「あいや、でかした。銀行に来て思  
いがけなく、濡れ手に粟の手に入る  
千両、こいつは春から縁起がいい  
わえ。(成駒屋!)」

「殿、銀行に来て、手に入る千両。  
これは、まさしく銀行強盗の成就  
にてはございますまいか」





「家老、ようゆうた。南無八幡大菩薩、このよしあしをして銀行強盗を成就せしめてたは神仏のご加護。」

「との、かくなるうえは」

「うむ、もはや、城へもどらむ」

佐藤田ミチコ進み出て。

「よしあし様におかれましては、天の鶴のご加護あり。

かくありぬるは、天下取れとの瑞祥か。」

「ようゆうた、ミチコ殿。かくなるうえは、徳川を倒し、

豊臣を平らげ、足利を足蹴にし、北条を平手打ち、源を

デコピンに、平家をば四の字固め、藤原をくすぐり責

め、聖徳太子を蠟燭責め、卑弥呼をば三角木馬、縄文土

器をかち割って、天下太平もたらさむうううう。」

囃子の中、八幡太郎よしあし一行、花道より退場。本

舞台では、佐藤田ミチコはじめあしか銀行たんぽぽ支店

一同が見送る。

(幕)





八幡太郎よしあし風雲録 一疾風編一

<http://p.booklog.jp/book/26100>

文：中川善史

絵：かないてつお

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

発行所：ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26100>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26100>